

緑爽会会報 No. 182

2022年10月25日発行
日本山岳会 緑爽会
発行人 荒井 正人



デザイン・制作 関塚貞亨

～～《報告》～～

初秋の要害山山行～上野原の山々の展望を楽しむ尾根歩き

春の山行で歩いた八重山・能岳のすぐ近くだけれど、要害山（ようがいさん）という名前が気になって秋の山行で登ることになった。戦国時代末期に、甲斐、相模、武蔵の国境警備のための大倉砦が築かれたという城山。今回は、尾続山から実成山、コヤシロ山、要害山と4つ（風の神様を入れると5つ）のピークを踏んでぐるっと一周する結構タフな歩きになった。

実施日：9月27日（火） 参加者：10名（写真参照）

中央本線上野原駅から富士急バスで20分足らずの尾続（おづく）バス停で降りるとすぐに登山口である。バス停の標識に尾続山・要害山とある。バス停の向かい側、花壇の前が駐車場になっていて、その脇から八重山へのトレイルがついている。初めて参加の栗城さんのために自己紹介をして、バス停横から民家の間をぬけて登山口に向かう。ちょっとした草原を抜けると登山口で、そこからすぐに直登が始まり、やがてジグザクの急な登りになる。まだ残暑の中、息を切らして30分ほど歩いたところで1本立てると、すぐに美味しいおやつが出てくる。ゆっくりしたペースで歩いた割には予定通り1時間ちょっとで、最初のピーク尾続山（538m）に到着した。小さな頂上の南に開けたところから雲の上に頭を出した富士山が見えた。（写真）

休憩のあと、緩やかな山道を30分ほど登ると実成山に着く。木立の中で眺望はなく、木にくくりつけた小さな標識に「ミナシ」とふり仮名がついている。今日のコースの中で最高地点（609m）なのだが、何もないのですぐに次のピーク、コヤシロ山に向かう。緩やかな道を15分ほどでコヤシロ山山頂（600m）に着いた。権現山につながる三叉路にある。この山頂は、以前は木立に覆われていたのが、2012年に行われた「八重山トレイルレース大会」を機に、ここを通るランナーが雄大な富士山を展望できるようにと木々が伐採され小さな広場も作られたと、立て看板にある。しかしこの日は雲が多く、富士山の雄姿は見られなかった。ここでザックを下ろして昼食。



昼食後、要害山に向かって歩き始める。ヒノキの木が並ぶ歩きやすい道をしばらく行ったあとは、やせ尾根の急坂を下りまた上る、この日一番の（我々にとって）難所だ。ロープが張られた急斜面を、滑らないように、あるいは木の根に足を引っかけないように、足もとを確かめながら慎重に下

る。そのあとは同じようにロープを張った急斜面を登り返すと、風の神様という、二人ほどがやっと立てる小さなピークに出る。斜面を上った目の前に小さな祠がある。周りは開けて権現山などの山々の展望はよいが、ここでも富士山は雲の中で見えなかった。



コヤシロ山頂で：（後列左から）小林敏博、富澤克禮、栗城幸二、川口章子、横関邦子
小清水敏昌、中村好至恵、石塚嘉一（前列）田井具世、鳥橋祥子

明るくなった尾根道から 30 分ほど下ると、左に登下（とっけ）の集落、右に大倉に下る分岐（峠）に出る。大きな木の下に古い灯笼が立っている。そこから 5 分も登ると、明るく開けた要害山の頂上に着く。頂上直下から、かつての山城を示す何段かの曲輪の跡が見られる。山頂には、杉の根本に秋葉大権現の祠がある。桜の木が数本あって、春はお花見山行によさそうだ。山頂の南側からは上野原の市内が見晴らされ、その向こうには石砂山や石老山、東の方には小仏城山、陣馬山などが、そして西の方には倉岳山、高畑山、高柄山など（中村さんの山座同定）。ここでもまた、下見のときに見えた富士山は雲の中で見られなかった。「要害山から富士山を眺める」と銘打った山行だったのに、残念だった。それでも展望を楽しむためにたっぷり休憩時間をとってあったので、それぞれにおやつや遠くの山々の眺望を楽しみ、中村さんは山の水彩画を制作。集合写真を撮って下山する。急な斜面を山神社まで下りてから小倉の集落を抜けて鏡渡橋に下った。初めから終わりまでゆっくりペースの歩きに力を持て余し気味に見えた横関さんや栗城さんと一緒に、一番に鏡渡橋に下り着いた。

尾続や鏡渡橋バス停を通るバスは朝 1 本、夕方 1 本だけなので、バスの便の良い新井までさらに舗装道路を 20 分あまり、疲れた足で歩かなければならない。鶴川に架かった鏡渡橋を渡り、また新井バス停までの坂道を上って何とか上野原行のバスに間に合った。「最後まで、あの難所を歩き通せて、がんばれたことがうれしい」とバス停で田井さんが言われたことが、この日の山行を象徴しているようだった。

富士急バスがパンフレットで「(山頂から) 富士山 (を望む) ハイキング」の初級のコースとして

宣伝しているが、山溪のガイドブックには中級向きとあり、コースタイムの1.5倍ほどの時間をかけた、とても歩きごたえのある山歩きではあった。（文：石塚嘉一、写真：中村好至恵、石塚）

《行程記録》上野原駅南口バス停 8：50⇒（バス）⇒9：08 尾続バス停・登山口 9：20→10：25 尾続山 10：35→11：10 実成山 11：15→11：30 コヤシロ山（昼食休憩）12：05→12：45 風の神様 12：50→13：25 要害山 13：50→山神社→14：45 鏡渡橋→15：10 新井バス停 15：19⇒（バス）⇒15：37 上野原駅

2年9か月振りに緑爽会の山行に参加して

川口 章子

わたくし事になります。夫が2013年に腎臓がんの宣告を受け、闘病生活がはじまり2019年秋には多臓器に転移していると告げられました。

時を同じくして新型コロナウイルス禍と夫のがん末期が重なり、夫に「ここまで闘病してきたのだから、死ねるのはしかたがないが、コロナまでも背負い込みたくないから気をつけてほしい」と言われ、お互い心残りがないように最終章を迎えようと話し合い、山行はもちろん外出もひかえることにしました。

さて、9月27日の2年9か月ぶりの「要害山」の山行は、思いもよらなかったことの連続でした。

上野原駅バス乗り場にゆとりを持って行くには家を5時出発。高尾駅で富澤さんに出迎え、2人で上野原駅に向かうと、皆さんに迎えられ、温かい声をかけられ、久しぶりの山行に参加できるとワクワクしました。

当日リーダーの石塚さんが調達して下さった「要害山トレッキングガイド」を開いても上の空で、バスに揺られ行程の字づらだけを見ていたと気が付いたのは登り始めてからでした。

バスを降りて歩き始めは平たんな道、登山口は草群で思わず「ここが登山口？」との声を聴きながら登り始めたのですが、気がつくとも急な登り坂、早々に息が苦しくなり始めました。尾続山までゆっくり歩いて1時間とリーダーが教えてくださるが、前との距離はあくばかり、焦るも歩く速度は上がりず皆の足を引っ張る山行となってしまいました。

やっと着いた尾続山から実成山、コヤシロ山と上り下りを繰り返しながら「低山をあなどるなかれ」と、登山をはじめた頃に教えられたことを思い出し自分の判断の甘さをかみしめました。

とりわけ大変だったのは履き慣れた登山靴が足に合わなくなっていたことで、下りで足の指が悲鳴をあげていました。帰りのバスの時間に間に合うかとリーダーは心配され、鳥橋さんは私が脱ぎ捨てた登山靴をもって2人がつききりで励ましてくださいました。何とかバスに間に合いましたが、参加者の方々にはご心配をおかけした1日となりました。

お世話になりました。感謝しています。



靴を脱ぎ、靴下で歩いてバス停へ

上野原の要害山

中村 好至恵

会の行事にずっと参加できずにいましたが、ようやく初秋の会山行に参加できました。新しく5階建て構造になった上野原駅前のバスターミナルに当日の参加者10名が集合。一日一本しかない「飯尾」行きのバスに乗り込み、「尾続(おづく)」で下車。登山口は人家脇の道を辿り次第に山道へと入って行きます。

当日は私も久しぶりでしたが、もっと久々参加の川口さんは山自体が2年ぶりとのこと。一気に隊列が賑やかになります。リーダーのすぐ後には田井さんがピッタリと付いて歩調も乱れることなく歩かれています。素晴らしい! この尾続からの登路は意外と急登続きで、朝一番からアルバイトを強いられ、初秋というより晩夏といった陽気にすぐ汗ビショリ。どこかでツクツクボウシも鳴いています。けれど、さすがに木陰に吹く風は爽やかな秋風でホッとします。

最初のピーク・尾続山で一息入れます。鳥橋さんが松本の田村さんに携帯から電話を入れ、一休みしている女性メンバーそれぞれが一言ずつ会話を交わすという場面になり、ワイワイガヤガヤ。そんな中、一息ついている小清水さんが川口さんを見て唐突に、「あのバック何とかって言う映画、あれに出てくる人に似ているよ」と。木の陰で休んでいた小林さんが「Back to the Futureのドク(博士)でしょ」と独り言のように答えます。「わ〜、ドクってあの髪の毛が爆発したみたいな…」と思って、ふとこちらを向いたサングラスの川口さんを見たら・・・「あらら、そっくり」。

この山頂では、たまたま「ウリハダカエデ」と「ウリカエデ」の木が並んで立っていました。それに気づかれた富澤さんが、木肌が似ている二つの木ですが、葉の形が異なっている点を指摘され、うまい具合に見比べることができました。初めて両者の違いがよく対比でき、富澤さんも「いい発見ができた」と喜ばれ、私も大変勉強になりました。

そして再びのアップダウンを繰り返して、次のピークは「実成山(みなしやま)」、展望もないので小休止して、また次なるピークへ。低山とは言え、繰り返しの登り下りがあります。そしてちょうど予定の時刻にお弁当休憩の「コヤシロ山」に到着。ここでは西方面の展望が開けています。ゆっくりと休憩し、私は簡単なスケッチもできました。

昼からの後半戦は、本命の要害山に向けての稜線歩きですが、急な下りから鞍部の峠へ、今度はロープも張ってある急登を越え「風の神様」という突端へ。ここで進路を東に変え、茅の茂る緩やかな登りを行けば、展望の開けた気分のいい要害山山頂に到着で



風の神様への急な登り



す。ここで大休止となり、思い思いに寛ぎ、そして全員で記念撮影。好天でしたが、雲も多い日で富士山は頭が見え隠れでした。山頂には立派な秋葉大権現が祀られていて、社の背後にはそれは立派な杉の木があります。この木のせいで、下界から見た時に腕を伏せたような山容が別名「おっぱい山」(左の写真)と呼ばれる所以となっています。

楽しいひとときを過ごし、下山開始。下界まで然程の距離ではないのですが、さて、登り以上に下りでかなり時間

を食ってしまいます。帰路は 15：19 発のバスに間に合う必要があるのですが、次第にバス時刻が心配になるような様相になってきました。というのも、あまりに久々の山行だった川口さんの足先が、登山靴のなかで悲鳴を上げ始めたのです。痛い、痛いとおっしゃるのですが、下ってもらわないと困るので、栗城さんにサポートをしてもらい、サブリーダー小林さんが W ストックを貸して、何とか頑張って小倉集落まで山道を下りて来ました。が、そこからの舗装道でも痛みは変わらず。リーダーの石塚さんも多少ヤキモキしながら「自分のストックは持って来なかったの？」 私：「はい、朝の混み合う電車で邪魔だからと、持ってみえなかったそうです。」 リーダー：「アホやな～！！」

そして川口さん曰く、「間に合わなかったら、みんな先に行っていいわよ」。私は「なるほど、気を使って、その場合はタクシーでも呼ぶのかな…」と思い、先に着いた皆さんと新井バス停で待っていましたら、充分間に合うタイミングで、鳥橋さんに付き添われて川口さんも無事到着。しかし、その足元は靴下姿で、登山靴は鳥橋さんの手に。痛みを耐えかね、道路は靴下にて白線の上をソロソロと歩いて来たとのこと。

「遅れたら、そこら辺走っている車を停めるつもりだった」と川口さん。すかさず「それってねー、若い人ならいいけど、ちょっとねえ…（無理じゃない?）」と周囲の反応。タクシーでも呼ぶ以外、他の手段はないと思っていた私は、内心すごく驚いて聞いていました。

ともかく、余裕を持って帰路のバスに乗車できたメンバーは、到着の上野原駅にて反省会組と帰宅組に分かれて、無事、楽しい山行を終えました。

遅れも見越した見事なタイムスケジュールを組んで、参加者をリードしてくださった石塚さん、しんがりをしっかり固めて下さった小林さん、また参加の皆さま、お世話になりました。どうもありがとうございました。（写真：中村さん提供）

～～《寄稿/投稿》～～

近藤信行さんを偲ぶ

松本 恒廣

近藤緑会員の夫、信行さんが長らく病氣療養中のところ、この7月17日亡くなられた。91歳。山岳会へは1956(昭和31)年に入会され(「山」928号 山本良三氏の追悼文に詳しい)、中央公論社で「中央公論」、「婦人公論」等の編集に携わった後、1978(昭和53)年、「小島烏水 山の風流使者伝」で第五回大佛次郎賞(朝日新聞社)を受賞された。因みに緑会員は「ミズバショウの花いつまでも 尾瀬の自然を守った平野長英」で第40回毎日出版文化賞を受賞されて、ご夫婦そろって最高の文学賞を受賞されている。

ある日たまたま手にした一冊は著者近藤信行とあった。山の本ではない。『炎の記憶 1945・空襲・狂気の果て』新潮社(2005年刊)。私にとっては、この書は少なからず因縁があると言っていいものだった。何が近藤さんをして、このような書を書かせたのだろうか。東京をはじめ、各地の空襲の惨状を記録したこの本の八王子地区での記述の中に私の家族が関係した時の一節があることだった。それによると8月5日

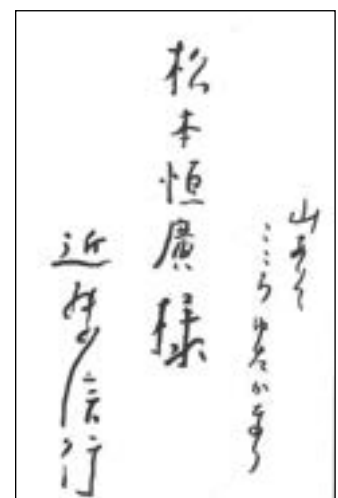
源次郎岳山頂で

新宿10時10分発長野行列車が浅川駅(現高尾駅)発車間もなく小仏の山間にさしかかった時、P-51米空軍戦闘機の機銃掃射を受けた。たまたまこの列車には信州へ疎開するために私の家族4人

も乗り合わせていたのだ。私はこの時学校疎開で青森県西津軽郡木造町にいた。襲撃を受けた列車は血の海となり惨状を呈した。背中合わせの隣にいた家族は全員死んでいたという。危うく私も被災孤児になる所だったのだ。そしてこの時のことが、JAC 会報「山」763 号の近藤緑さんの書評（『心の山登り』山岳写真家・三宅修・三宅岳著）にあるのにはびっくりした。修氏もこの場に居合わせたのだそうだ。余談になるが、これより前、3月10日の東京大空襲は私にとって2年の春休み。世田谷の我が家の防空壕から燃え盛る江東下町辺りから立ち上る黒煙を見上げていた。あの夜、米の重爆撃機“超空の要塞” B-29、334 機の大編隊が焼夷弾を撒き散らしたのだ。高度 2000m、これは雲取山の高さである。犠牲者 10 万人余。隅田川は流れてくる焼死体で埋まったという。

会報「山」の目録から推察するに、近藤さんが最初に書かれたのは、320 号にある、深田久弥著作展目録辺りではなかろうか。以後、集会報告、有志懇談会、山岳史懇談会、図書交換会等の報告記事を書かれておられたが、やがて論説研究随想の稿に「霞沢岳の東面—烏水追跡紀行—」<1974（昭和 49）年 11 月号 353 号。以後 369 号、370 号>を寄稿され、次いでレポート「アメリカの小島烏水」「小島烏水の足跡を尋ねて」と続き、後の『山の風流使者伝』に結びつくことになる。緑爽会では信行さんには大変お世話になった。もちろん、緑さんの力添えがあつてのことだろうが、幾つかの会合はおかげで格調高いものになった。

最初は緑さんが主宰されていたグループ、フォーラム IN との共催行事の一つとして、2003（平成 15）年 11 月、桜枝岐で行われた会合だった。日本山岳会発起人の一人、武田久吉博士についての座談会で、長女の武田澄江さん、次女の林静江さんから、“非常に厳格な人だが、ユーモアの精神があり、皮肉の上手な人” という一面を語らせ、共に山歩きしていても、のびのび楽しく出来たこと、武田博士の原点はフィールドワークの現場だった日光にあることなど、話は父アーネスト・サトウにまでおよんだ。



2005（平成 17）年 9 月、「山岳画家茨木猪之吉を語る会」では、猪之吉氏の遺族長男岳人、次女横山駒子氏を迎えて盛況だった。山岳会での話から安曇野との関わり、小諸における若山牧水との出会いまで、彼の青春時代を偲んで、昭和 19 年秋、白出沢で消息を絶った彼の人生が紹介され、終始信行さんらしい、ソフトな司会進行ぶりであった。

2007（平成 19）年 2 月は鼎談「山の人生・山の文化」近藤信行（元図書委員長）、山本良三（元自然保護委員長）、平井吉夫（図書委員長）の三氏に、今西錦司、深田久弥、山崎安治各氏の思い出を話してもらった。1956（昭和 31）年近藤さんは深田さんに誘われ、横山厚夫さんと一緒に入会したそうです。近藤さんは、山本、平井の



近藤さんのお宅「参山居」にて山本良三さんと

両氏からうまく話を引き出しておられた。山崎さんとの思い出は何と云っても小島烏水の足跡を調査しようと霞沢へ行ったことだという。

2011（平成23）年11月19日の例会は「井上靖『氷壁』とその時代」と題して対談形式で行われた。講師として迎えた石原國利さんは1955（昭和30）年正月にかけて起きたナイロンザイル切断事件の当事者で、これを基にして井上靖が朝日新聞紙上に、小説『氷壁』を連載して大評判となった。

麻のザイルより比較的安全とされていたナイロン製ザイルに事故が発生。中央公論社で井上靖の担当だった近藤さんがこれ以降拘わっていくことになる。JAC内部でも議論が交わされて、当時理事会でメンバーの一人だった私は、ザイルワークには無知に等しく、正直内容がつかめず、蚊帳の外であった。この時の報告書が井上氏の手へ渡り『氷壁』を書くきっかけになったという。新聞連載小説となり映画化もされた。女主人公、美那子夫人に扮した山本富士子の評判もすごかった。

それはともかく世間を騒がせたこの事件は、近藤さんの仲介でひとまず決着した。蛇足だが、今私の本棚に愛読書の一つとして『氷壁』がある。2段組、300ページ、箱入り。装丁写真が風見武秀、扉表紙文字が棟方志功。当時の定価が参百拾円とある。

これより先、近藤さんは2005（平成17）年より2013（平成25）年まで、山梨県立文学館の館長を務めておられた。05年10月には「山の文学展—日本人 美とこころのふるさと」が開催され、ちょうど近藤ご夫妻、山川陽一さんと訪ねた時はたまたま登高会（慶大山岳部OB会）のメンバー、山田二郎、宮下秀樹、田辺壽の皆さんと一緒に、近藤さんのすすめで部歌「守れ権現」を合唱したりした。今ではいい思い出である。謹んでご冥福をお祈りいたします。

（写真：松本さん提供）

～～《予告など》～～

11月山行 前号でご案内の通り、石井会員に奥多摩を案内していただきます。JR奥多摩駅、白丸駅周辺の歴史道を歩くハイキングです。約5kmの行程ですが奥多摩の歴史を物語るいろいろな史跡等があり、紅葉とともに観賞しながら歩きます。

実施日：11月10日（木） 雨天中止

集 合：9時45分 JR奥多摩駅前（立川発8：21 青梅乗り換えで9：33に着きます）

行 程：奥多摩駅→奥氷川神社参拝→紅葉の氷川溪谷歩き→多摩川沿いの路→奥多摩さかな養殖センター（大型改良魚の奥多摩ヤマメ見学）→数馬峡橋（景勝地）→数馬隧道（昼食）→数馬の切通し（1700年頃の道）→白丸集落内散策（日本画家川合玉堂散策の道等）→白丸ダムと魚道見学→数馬峡と白丸湖畔歩き→JR白丸駅（歩行時間は約4時間）

担 当：石井秀典、富澤克禮

持ち物：昼食、飲料水、敷き物、マスク、雨具、ストックなど

参加申込：11月5日までに下記へお申込みください

石井秀典

富澤克禮



12月忘年会

年次晩餐会は規模を縮小して開催されますが、ルームの使用はまだ制限があります。ついては、暑気払いと同じスタイルで、下記の通り忘年会を開催いたします。出席希望の会員は、12月10日までに下記までご連絡願います。

開催日：12月17日（土）12時～14時半 当日は講話を予定しています。

場 所：中華料理「西安（シーアン）」

会 費：3000円

申込先：鳥橋祥子
荒井正人

1月山行：千駄ヶ谷富士と文京区内富士塚巡り

往時の姿を残す富士塚としては23区内最古といわれ、渋谷区に現存する唯一の富士塚・千駄ヶ谷富士と文京区内の富士塚を巡ります。

実施日：2023年1月20日（金）

集 合：JR千駄ヶ谷駅改札口外に10時

行 程：千駄ヶ谷駅→千駄ヶ谷富士→千駄ヶ谷駅⇒（市ヶ谷駅で東京メトロ有楽町線に乗り換え）
⇒護国寺駅→音羽富士→小石川植物園（昼食）→白山富士→海蔵寺（身禄山碑）→駒込富士→
駒込駅 歩行時間：休憩込み約5時間

※富士塚に登拝される方は、滑らない靴でご参加ください。

※ご自宅から集合場所・解散場所からご自宅への交通費以外の費用として千駄ヶ谷駅⇒東京メトロ護国寺駅310円、小石川植物園入場料500円、計810円が必要です。

担当：CL 小林敏博、SL 石塚嘉一

申込：1月16日（月）までに小林へ



2月例会

芳賀会員のお話を聞く会・・・アルパイン・スケッチクラブの毎年恒例の展示会が開催されるかどうかなどの状況によって開催可否を決定いたします。今後の会報等にてお知らせいたします。

永年会員、おめでとうございます

この度、松本恒廣会員（No. 7440）、佐藤淳志会員（No. 7446）、福田光子会員（No. 7585）の、お三方が永年会員となりました。

編集後記

22日の講演会「関東地方を取り囲む峠を歩く」は無事終了しました。（報告は次号）実は私がコロナに罹ってしまい、その運営やこの会報発行は幹事の皆さんでやっていただきました。緑爽会は皆でやる会だと改めて認識した次第です。これが届く頃には回復していると思いますのでご心配なく。（荒井正人）最近まで暑いと思っていたら、初冬のような寒い日ともうやってきました。秋を感じる期間が短いので、11月山行の奥多摩で盛りの紅葉を楽しみましょう。（小林敏博）

次号予告＜12月26日発行の主な内容＞

10月講演会報告、11月山行報告、寄稿・投稿など